可西晴香氏(かさい・はるか)
1958年南砺市生まれ。県洋舞協会長。2003年プラハダンスフェスティバルでグランプリ。09年プラハの国立スタヴォフスケー劇場で日本人初演出・振り付け。国内外の多数の舞台で演出、振り付け。11年松山バレエ団「芸術賞」、19年「江口隆哉賞」、21年「地域文化功労者表彰　文部科学大臣賞」受賞。とやま世界こども舞台芸術祭実行委員長。

HARUKA KASAI

RANKOH FUJIMA

藤間蘭黄氏(ふじま・らんこう)
1962年、東京生まれ。江戸時代より続く藤間流勘右衛門派の「代地」の芸系を守る。祖母・藤間藤子(重要無形文化財保持者)、母・藤間蘭景から踊りの手ほどきを受ける。古典の継承とともに創作作品も積極的に発表。2015年芸術選奨文部科学大臣賞、19年度日本芸術院賞、20年紫綬褒章。

世界各国の子どもたちが演劇や舞踊などを披露する「第4回とやま世界こども舞台芸術祭(PAT2022)」が7月30日～8月3日に県内で開かれる。オープニングを飾るのが、日本舞踊と洋舞がコラボレーションした越中万葉創作舞踊「万葉高志の国」。脚本、演出、振り付け、そして主演の大伴家持役で日本舞踊家の藤間蘭黄さん(東京)と、振り付け補佐として共に舞台を作り上げる県洋舞協会長の可西晴香さん(高岡)が作品の魅力や表現者としての思いを語り合った。

――「万葉高志の国」は立山や花、海など、大伴家持が歌に詠んだ県内の情景が多彩に表現された作品です。

［藤間］　初演は今から4年前ですね。依頼を受け、まず久泉迪雄先生の原作を読ませていただきました。大伴家持が万葉集を編さんしたのはもちろん知っていましたが、越中に関する歌をこれほどたくさん詠んでいることに驚きました。久泉先生と可西先生と一緒に立山連峰や富山湾を見に行き、大伴家持が見たであろう景色が変わらずに残っていることに非常に感銘を受けました。家持の歌に詠まれた景色や花、何よりも人々の心が今も富山に存在している。大変素晴らしいと感じ、それを舞踊作品として表現したいと思いました。

［可西］　富山県民にとって「万葉」という言葉は身近です。私は家持が越中国守として赴任していた高岡市に住んでいるのでなおさらです。万葉集にちなんだイベントも多くありますね。

普段から大伴家持の歌に親しんでいると思っていたのですが、この舞台によって富山のよさを改めて実感することができました。私たちの心の中に立山連峰や日本海が生きているんです。風景と人の心、それも古代の人が生きた富山と現代を生きる私たちが時空を超えて一つになる―。そんな壮大なテーマが作品の魅力の一つです。

――2018年から公演を重ね、4回目となります。オーバード・ホールでの上演は初めてですね。

［藤間］　これまでとは劇場の大きさが全く違います。オーバード・ホールはオーケストラピットを上げて、エプロンステージ(張り出し舞台)にしてあります。奥のステージで舞台を完結することもできるのですが、そうすると客席と演者の距離がとても遠くなってしまう。本来の振り付けの魅力が失われるように感じました。エプロンステージは平らではなく段差があるのですが、前へ前へと出るように舞台の使い方を変えました。踊り手の皆さんは大変なのですが、迫力ある舞台に仕上がるでしょう。

［可西］　同じ作品であっても劇場が変われば空間の構成が変わり、動きも自然と違いが出てきます。目線などにも気を配らなければいけません。演じる側にとっては経験が積めて面白いし、挑戦しがいがあります。オーバード・ホールは客席が広く、これまで以上にエネルギーが必要です。空間の大きさや舞台上の踊り手が客席からどのように見えるかを考えて練習したいですね。

［藤間］　一般的に、再演や再々演では初演が良かったからとの理由で見に来られる方が大勢いらっしゃいます。非常にありがたいと思うと同時に緊張します。なぜなら初演のイメージを膨らませてご覧になるからです。同じ舞台をやっているだけでは、がっかりさせてしまうでしょう。ご期待に添える舞台を提示しないといけないんです。初めての方はもちろん、何回も観ていただいた方にも十分ご満足いただける舞台にしたいですね。クオリティーを上げるのは当たり前で、可西先生がおっしゃったように広い空間で客席までどうエネルギーを伝えるかが鍵です。一人一人の気持ちに懸かっています。

［可西］　初演から4年たち、演じる子どもたちも成長しました。場面の意味を深く理解できるようになったと思います。例えば大伴家持の歌から想像を膨らませる。古代を生きる人たちや現代の私たちに思いをはせる。きれいに踊るだけではなく、もっと作品に入り込んでいくための指導も大切だと思います。総勢130人で客席の皆さんの心に届く舞台を演じきりたいです。

――富山県洋舞協会の皆さんにはどのような印象を持っていますか。

［藤間］　忘れられない出来事がありました。後ろに立山連峰、下に日本海の荒波が見える舞台を、映像や大道具のセットを用いるのではなく、踊りで表現したいとお願いしました。お稽古の初日に可西先生が「こんな風でいかがでしょう」と見せてくださいまして、本当にステージに山や海があるかのようでした。「富山の現代舞踊の力はすごい」と、びっくりしました。踊り手の皆さんの適応能力もとても高いです。舞台は予定通りに進むとは限りません。その場その場でさまざまな変更に適応していくことは大事なのですが、それは普段のお稽古では教えられるようで教えられません。でも富山の子どもたちは自然にできているように感じました。今回のステージの違いに伴う新しい動きにも適応している。基礎練習の量や密度があるからこそ身に付いているのではないでしょうか。

［可西］　とやま世界こども舞台芸術祭では県洋舞協会が毎回オープニング公演を担当しています。出演者は自分の所属する団体以外の子どもから大人までの踊りを間近に見ることで大いに刺激を受けます。教える側も連携し、別の教室や研究所の生徒の振り付けも自然に指導しています。そういった取り組みが一つ一つ積み重なって今があるのだと感じています。協会では洋舞というくくりの中で挑戦を続けてきました。「万葉高志の国」は協会を構成する各団体の個性を発揮できる場面がたくさんあり、新たな境地を切り開けたと思います。

――お二人はこれまでも多くのコラボ作品に関わっています。

［藤間］　20年余り前に、バレエと歌舞伎のコラボレーションで初めて大きな作品に携わりました。その時から、私自身も出演した「信長-NOBUNAGA-」など、さまざまな作品を創ってきましたが、全て互いに一番の得意技を持ち寄ってぶつけ合うよう心掛けています。踊り手の心理としては自分と異なるジャンルの踊りは新鮮なので取り入れたいのです。が、それは相手の方がはるかに得意なんですね。お互いに歩み寄ったら中途半端なものしかできない。歩み寄らずに、それぞれの得意技を十分に生かした振り付けがコラボを成功させるためには欠かせません。

［可西］　それぞれのいいところがそれぞれのいい形で表現されて一つになるのが理想です。音楽もそうです。踊り手は音を受けてどう表現するか、演奏者も踊り手の表情や動きを感じながら奏でてもらうのが大切です。舞台をどう作っていくかを共に考えていくのが鉄則だと感じています。

――改めて舞台への意気込みを聞かせてください。

［藤間］　この作品は子どもや若者が大活躍しますから、とやま世界こども舞台芸術祭のオープニングを飾るのは大変意義があります。ご期待に添えるよう子どもたちに今まで以上に光を当て、これだけの力があるのだと感じていただきたいと思います。

［可西］　コロナ禍で2020年からさまざまな制約がありました。子どもたちも、どこか一歩踏み出せずに苦しかったと思います。この作品をオープニングで演じることで思い切り表現してほしい。富山を題材にした作品を全国や世界に発信できるチャンスでもあります。たくさんの方に劇場に足を運んでいただき、楽しんでほしいです。

PAT2022 オープニング公演
越中万葉創作舞踊「万葉高志の国」

越中ゆかりの万葉歌人、大伴家持の生誕1300年を記念して制作された。立山や花、海、人間模様など家持の目に映った五つの場面で構成し、2018年に県民会館で初演された。県洋舞協会の子どもらが出演。原作は歌人の久泉迪雄(みちお)さん(富山市)、音楽は作曲家の八幡茂さんと射水市出身の箏曲家、黒川真理さんが担当する。

日時　7月30日(土)13:00～　会場　オーバード・ホール(富山市)
チケット　大人(高校生以上)1,000円、こども(中学生以下)無料(保護者同伴、入場券要)、
オンライン視聴チケット基本料金1,000円 ※「万葉高志の国」含むオーバード・ホール公演ライブ配信に加え、全公演を3日間オンデマンド配信視聴可能
プレイガイド　北日本新聞本社1階プレイガイド、アーツナビ、アスネットカウンター、
とやま世界こども舞台芸術祭実行委員会事務局 ※こども券は実行委で取扱い
問合せ　とやま世界こども舞台芸術祭実行委員会　TEL.076-441-8635(内線123)